

肢体不自由教育における「主体的な学び」を考える（3）

ー特別支援学校（肢体不自由）における ICT 活用の現状と展望ー

企画者	船橋 篤彦（広島大学大学院人間社会科学研究科）
司会者	船橋 篤彦（広島大学大学院人間社会科学研究科）
話題提供者	藤本 圭司（広島県立西条特別支援学校）
	古山 貴仁（ロッテルダム日本人学校）
指定討論者	荻田 知則（愛媛大学教育学部特別支援教育講座）

KEY WORDS: 肢体不自由教育, ICT 活用, 主体的な学び

（企画趣旨）

本シンポジウムは、日本特殊教育学会第 54 回大会・55 回大会にて開催された『肢体不自由教育における「主体的な学び」を考える（1）・（2）』に基づき、さらなる協議を展開するために企画した。

これまでの協議では、肢体不自由教育において「主体的な学び」を創出するにあたって、児童生徒の有する障害の程度に依拠した「主体的な学び」ではなく、「学び」の本質が「主体的」であるという原点に立ち返った実践を集積する必要性が確認された。

さて、我が国では、GIGA スクール構想の実現に向けた取り組みに加え、世界中に大きな混乱をもたらした、今なお、我々に脅威を与え続けている新型コロナウィルスの感染拡大を奇貨として、学校教育における ICT 活用は、想定を上回る速度で進展しつつある。

特別支援学校においても、学校ホームページでオンライン学習やタブレット端末を活用した実践を紹介した記事が目につくようになり、今後さらなる発展が期待されるものである。折しも、学習指導要領が改訂され、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた取り組みが活発化していることも追い風となるであろう。

他方、懸念すべき点もある。それは、教育方法（手段）が先行する余り、教育内容（目的）の吟味が疎かになることである。「この道はいつかきた道」とならぬよう、コロナ禍の今こそ、特別支援学校（肢体不自由）における ICT 活用の現状と展望について協議することが必要であると考え、本シンポジウムを企画した。

（話題提供：藤本 圭司）

肢体不自由のある児童生徒は、経験や体験が少ないことで、生活場面における実感が伴いにくく、学んだことを生活場面で活用する機会が乏しくなっている。このことは、学習内容の理解や定着がうまく図れないこと、興味・関心の幅を狭めてしまうこと、周囲の環

境との調整意識を乏しくしてしまうことなどの原因となる。広島県立西条特別支援学校では、令和 3 年度より肢体不自由のある児童生徒の主体的な学びや生活の自立を引き出すための環境支援として、スマートスピーカー（Google Nest Hub Max）を導入し、授業の中での調べ学習や、日々の生活で疑問に感じた事を調べるために活用していく取り組みを開始した。本発表では、これまでの取り組みの報告と今後の展望について報告する。

（話題提供：古山 貴仁）

小学校に準ずる教育課程で学ぶ肢体不自由児の中には、身体の動かしにくさがあることで、自身の学習・生活環境を調整する為に、主体的に活動する経験が不足しやすいという課題がある。本報告では、筋緊張が強く、学習動作や生活動作を行うことが難しい児童に、スマートスピーカー（Amazon Alexa）を活用した事例について報告する。随意的な動きに困難さがあるため、上記のような動作は、家族や介助者等、周囲の人に依頼する必要がある。これらの困難さを解決するために、スマートスピーカーを導入した。自分でリモコンを操作したり、照明のスイッチを押したりすることができるようになり、自分で生活を調整する有効な手段となりうると考えている。

（指定討論：荻田 知則）

2 名の話題提供者からの報告を踏まえて、ICT 機器を活用した支援を長年に渡り行ってきた専門家の立場からコメントを提供する。また、障害者の学校卒業後の学習支援等についても協議の題材とした。

なお、各話題提供の事例等については、個人情報厳守し、対象者・関係者から公開の了解を得ていることを付記する。

（FUNABASHI Atsuhiko, FUJIMOTO Keiji, KOYAMA Takahito, KARITA Tomonori）